

ポイント 短歌の文法

第二回

安田

純生^{すみお}

かつての流行語「べらなり」

前回は助動詞の「べし」について述べましたので、今回は、その関わりで「べらなり」について述べます。

「べし」は形容詞と同様の活用のしかたをする助動詞です。そして形容詞の場合、「清し」を例にとりますと、「清ら」という言い方があり、それに「なり」を続ければ「清らなり」となって、これを一般的には形容動詞と称しています。いっぽう「べし」にも、「べら」に「なり」を続けた「べらなり」ということばがありました。この「べらなり」は、それで一語の助動詞と理解されています。中世以後の和歌や近代の短歌では多用されていけませんので、聞き慣れないように思う読者もいるでしょうか。しかし、「古今集」で二十五例ほどの用例が見られ、同集の選者であった紀貫之の『貫之集』では六十例余りの用例が見られます。十世紀の頃には、ありふれたことばでした。『古今集』巻十七から一例だけあげておきましょう。よみ人しらずの作です。

おそく出づる月にもあるかなあしひきの山のあなたも惜しむべらなり

「あしひきの」は、むろん「山」の枕詞です。山の向こうから出る月を今か今かと待っているのですが、なかなか出てこない。どうも、山の向こう側の人が月を惜しんでいるようだ。月は、山向こうの人々の心を無視できないので、山のこちら側になかなか現れないのではないかと想像しているのです。つまり、「惜しむべらなり」で「惜しんでいるようだ」という推量をあらわしています。佐佐木信綱が明治二十五年に出版した『歌の栞』には雅語を明治の話しことばに言い換えた「雅語俗訳」の章がありまして、ここでは「べらなり」が「サウナヤウスヂヤ」と訳されています。片仮名だけの表記だとわかりにくいのですが、「…そんな様子じゃ」ということです。それにもとづきますと、「惜しむべらなり」は「惜しんでいそうな様子じゃ」という意になるでしょう。

十世紀の頃の京では、この「べらなり」が、少し硬質な語と意識されながらも話しことばで盛んに用いられていたらしく、当時の和歌における「べらなり」の多用は、話しことばの投影と見られています。ところが、十一世紀の頃には話しことばから消えて行き、古めかしい用語と思われ始めたようです。流行語は、流行しているときは、いかにも現代的なものに思われているのですが、流行期が過ぎると、ただちに古めかしさが纏いつくものです。古語の使用が好まれる傾向のある和歌でも、「べらなり」は、避けるべき語の一つとされるようになりました。

鎌倉時代の歌人、藤原為家も、「物わらひ」のもとになるので「べらなり」などは使うな、という意味の主張をしていますし、江戸時代に有賀長伯が著した入門書『和歌八重垣』にも、「べらなり」について「今は詠むまじきことば也」と書かれています。後世

の歌人の多くは、和歌にふさわしい用語と想っていないのです。近代になっても同様で、たとえば折口信夫は、その著『日本古代抒情詩集』（『折口信夫全集』第十三巻所収）のなかで、在原元方の歌の「べらなる」について、

此頃の流行語。さかんに用ゐられてゐるが、何か品の悪い感じがある。漢文家の流行させた語ではないか。

と書いています。「此頃」は『古今集』の時代を指し、「品の悪い感じ」がするのは、いかにも、その時代の流行語だといったような軽薄な印象を有しているからではないでしょうか。

もちろん、中世や江戸時代に、和歌に使われぬ死語になりきっていたのなら、「使うな」と、わざわざ注意を促す必要はありません。「使うな」といわれているということは、「べらなり」を使う歌人がいた現実を示しているのです。

中世の例は省略して、幕末期以後の用例を少しあげておきましょう。

すずしくも流るる月のかつら川その鮎さへ数ふべらなり

岩倉具視『岩倉贈太政大臣集』

舟に叫ぶ海人が叫びはおほかたは海人どちのみにきこゆべらなる

若山牧水『山桜の歌』

よべ捕りし蜘蛛は特にも大きくてわがてのひらに余るべらなり

尾山篤二郎『雪客』

支那駐屯軍参謀長に吾が訊けば明日にも戦争起るべらなり

川田 順『鷲』

具視の歌の「数ふべらなり」は「数えることができるようだ」の意、牧水の歌の「きこゆべらなる」は「今、聞こえるようだ」の

意、篤二郎の歌の「余るべらなり」は「今、見ると、てのひらに余る大きさのようだ」の意、順の「起るべらなり」は「近い将来、起りそうだ」の意で、歌によって、「べらなり」の意味合いが微妙に異なっています。前回、「べし」は、ラ変の語以外の語には終止形に接続するといいましたが、当然ながら「べらなり」も同様でして、右の四首でも終止形に続けられています。もっとも、「余る」「起る」は終止形と連体形とが同形のために区別ができませんけれど、「数ふ」と「きこゆ」に関しては、「数ふるべらなり」「きこゆるべらなり」となっています。

右にあげた四首の作者は、「べらなり」に対し、どんな感じを抱いていたのでしょうか。少なくとも、折口のように「品の悪い感じ」を持っていたとは思えません。つまり軽薄な流行語とは捉えておらず、古風な語と感じていたとしても、古くさい語とは捉えていなかったような気がします。具視などは、むしろ、雅な感じを取っていた可能性もあります。また、『古今集』の時代を除けば、用例の少ないことばですので、その耳馴れないところに、かえって新鮮さ、おもしろさを感じていたかもしれません。

「べらなり」の活用を次に表示しておきます。ただし、平安時代の和歌に連用形の用例は見いだせませんし、連体形や已然形は、係結びになつている場合にそれが見えるのでして、「べらなる」が名詞に続いた例や、「べらなれば」とか「べらなれど」とかいった例が出て来るわけではありません。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
○	べらに	べらなり	べらなる	べらなれ	○

やすだ・すみお●昭和22年、大阪生まれ。箕面市在住。「白珠」代表。著書に『歌集の森』、歌集に『でで虫の歌』など。